

研究テーマ：地域総合研究の一環としての竹原・吉井家文書の調査および基礎的研究	
研究代表者（職氏名）： 人間文化学部 教授 西本寮子	連絡先（E-mail 等）： nisimoto@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：広島県立文書館主任研究員 西村晃、同副主任研究員 西向宏介 県立広島大学人間文化学部教授 樹下文隆、同 菅原範夫	

## はじめに

平成 18～19 年度、竹原市本町の吉井家に伝わった膨大な歴史資料のうち 2600 点余が、広島県立文書館の寄託となった。それを承けて、平成 18～20 年度まで 3 力年にわたって文芸関係資料の共同調査・研究を実施した。

### 1 3 力年にわたる調査・研究結果の概要

- (1) 300 点余の和書（タイトル数）のうち、出版された書物については、広島県内に伝存するものとしてはもっとも古い江戸時代初・中期に出版されたものを含む。塩田経営で経済的に潤っていた竹原の人々が、内海交通の発展に伴って人的交流を広げ、経済活動のみならず学芸にも熱心であり、早い時期から文化的に高いレベルを保っていたことをうかがわせる。
- (2) 竹原出身の歌人吉井豊庸、道工彦文の活動と、知のネットワークの広がりが知られる資料があることが判明した。ネットワークは内海一帯への広がりを持って築かれていること、特筆すべきこととして、巖島の光明院恕信との親密な関係を窺わせる資料の伝存を確認した。宮島学研究への発展が期待される。
- (3) 後水尾、霊元院時代に活躍した有賀長伯に関わる資料の伝存を確認した。長伯研究は近畿圏に伝わる資料にもとづいて神作研一氏のグループによって進められているが、竹原に伝わる資料については、利用できる環境にはなかった。これにより、長伯の文化活動の解明に寄与しうる基礎資料の提供が可能になったことになる。とりわけ、江戸時代初期の霊元歌壇の広がりや特色の一端を地域資料によって解明することも可能になった。
- (4) 謡曲関係 k 資料に他地域ではほとんど確認されたことのない資料の伝存が見られる。資料伝播の解明、個の学びの実態とともに、広島藩における能楽普及の実体解明の研究などへの展開が期待される。

### 2 研究成果を地域に還元することを目的とした公開講座の開催

調査研究の成果の一部を地域に還元することを目的として、竹原市が市制 50 周年を迎えた平成 20 年 11 月から 12 月にかけて、公開講座を開催した。実施にあたっては、地域連携センターの全面的な協力を得て、竹原市・広島県立文書館・県立広島大学の共催とした。

#### (1) 講座の構成と各回の要旨

第 1 回 平成 20 年 11 月 8 日（土）

##### 広島藩主の鷹狩りと竹原吉井家（広島県立文書館 西村晃）

寛政 5 年（1793）浅野重晟が行った鷹狩りと吉井家の関わり、および藩主一行に対するもてなしの様相を、史料を用いて具体的に解き明かした。

##### 吉井家文芸資料に見る和歌の学びの伝統（県立広島大学 西本寮子）

竹原を代表する歌人吉井豊庸、道工彦文に関わる資料から、中央から地域への文化事象の伝搬と、巖島を含む藩内における活発な文化活動について報告した。

第2回 平成20年11月29日(土)

**頼山陽の手紙を読む 青年期・江戸遊学の足跡 (広島県立文書館 荒木清二)**

江戸遊学中は放蕩生活をしていたという通説の山陽像の誤解を、山陽自筆の手紙を読み解くことによって覆し、勤勉な生活振りを明らかにした。

**江戸時代の町人と能楽 吉井家能楽資料を中心に (県立広島大学 樹下文隆)**

五番綴謡本など能楽研究史上極めて貴重な資料の伝存を指摘し、江戸時代の謡い文化の普及と広がり的一端を明らかにした。さらに現代に受け継がれる祭礼行事の淵源のひとつが竹原でも認められることに言及した。宮島学への展開が期待される。

第3回 平成20年12月13日(土)

**講演「竹原書院の古文書から広がる世界 先人の知恵と努力に学ぶ」**

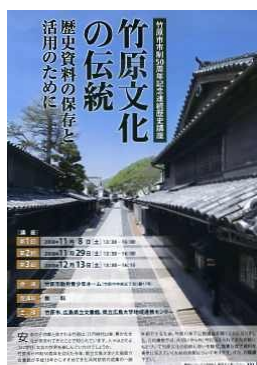
**広島大学文書館・広島県立文書館調査員 石田雅春**

竹原書院図書館が所蔵するたばこ栽培史料にかかる整理、研究事業に携わった経験をふまえて、史料研究の成果を披露し、史料保存の意義について講じた。また、地域の史料を後世に伝えるべく努力を重ねた吉井省吾など地域の人々の熱意について紹介があった。

**パネルディスカッション「歴史史料の保存と活用のために」**

広島県立文書館副館長安藤福平をコーディネーターとし、講座担当者および講演者の石田雅春氏に加えて、竹原市総務部総務課長の今栄敏彦氏をパネリストとして迎え、「歴史資料の保存と活用のために」と題するパネルディスカッションを行った。史料の保存に携わるアーキビスト、研究者、行政担当者それぞれの立場から貴重な資料を保存し活用するための方策について示唆に富む提言がなされた。史料保存機関と大学との研究連携の可能性、地域興しと関連づけて史料を活用した他地域の事例紹介と竹原における活動についての提案、市町村合併に伴って複雑化し増え続ける歴史資料(行政文書を含む)の保存についての行政サイドからの発言などがあり、示唆に富む内容であった。

\*3回の講座に延べ261名の参加があり、市民の関心の高さがうかがわれた。



竹原市教育長前原氏による挨拶

### 3 今後の展望

本研究の特徴は、研究成果を公開講座という形で地域に還元したことにある。従来のような論文発表にとどまらず、史料が伝わった地域において研究成果の報告を行ったことに意義がある。パネルディスカッションを行い、行政担当者を交えて意見交換を行う場を設けたことについては、これまでにない一歩踏み込んだ試みであり、共同研究の新しい形を提示し得たのではないかと考えている。今後は、遅れている資料目録の完成を急がねばならない。